

2023年度 独創的研究助成費 実績報告書

2024年 3月14日

報告者	学科名	建築学科	職名	准教授	氏名	岡北一孝
研究課題	建築書と素描からみるイタリア・ルネサンスにおける「古代建築」像					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	岡北一孝	建築学科・准教授	西洋建築史	研究代表者	
研究実績の概要	分担者					
	<p>本研究の成果は、15世紀のローマにおける建築家たちの古代建築に関する認識の一端を明らかにしたことである。1450年ごろの都市ローマはインフラもモニュメントも荒廃していた。古代の建物からは大理石など貴重なものが剥ぎ取られており、遺物は野放途に利用されていた。そこから教皇主導の「都市の復興 Renvatio Urbis」の時代が始まる。この時、建築家たちはどのように都市ローマの遺跡や遺物に向き合っており、創作活動に取り組んでいたのだろうか。15世紀後半の建築家たちは大きく分けて二つのアプローチで古代の遺跡に接した。</p> <p>一つは、それを保護、保存しようとする動きであり、もう一つは廃墟がもたらす想像力を創作の原動力とすることである。そこで本研究では、前者の代表例として、万能の天才と呼ばれたレオン・バッティスタ・アルベルティを、後者からはアルベルティと並んで15世紀後半の建築界のキーパーソンであり、古代建築言語の導入と推進に大きな役割を果たしたジュリアーノ・ダ・サンガッロを取りあげて考察した。</p> <p>アルベルティは、人文主義者フラヴィオ・ビオンドの「instauratio」を共有していた。教皇庁の人文主義者であったビオンドはローマの遺跡の現状を描写した『ローマ復興 Roma instaurata』をエウゲニウス四世に捧げた。そこでは異教的な権威あるモニュメントがキリスト教の文脈の中に位置づけられる。古代の遺跡を新しい時代の始まりの基盤にすえて、廃墟と化したローマを、人文学的な学識によっていまも生きている「永遠の都」として見事に構築している。その中心にいるのが教皇（とりわけエウゲニウス四世）であり、二つのローマ（異教とキリスト教）をつなぐ偉大な存在による都市改造が、記念的事業であることを明らかにしている。瓦礫の山から生まれ変わるローマは、再生と復活を象徴する不死鳥を想起させる。このイメージはイエスの復活にも関連しており、キリスト教の首都、教皇の都としてのローマの再生という文脈には特にふさわしい。また、タイトル『ローマ復興 Roma instaurata』の「復興 instauratio」は、帝政期ローマではほとんど使われていなかった用語であるが、古代末期から近世まで広く読まれたラテン語訳聖書のウルガタ聖書では神聖な建物の修復という文脈で頻用された。その点においても、ビオンドの書は神の国としてのローマ復興を強く印象づける。</p> <p>『建築論』の第十書の書題が「建物の修復 operum instauratio」であることは、アルベルティなりの当時のローマ復興へのメッセージであろう。異教とキリスト教のモニュメントが混在するローマの現状を、ビオンドとは別のアプローチで記録し後世に伝えようとした。過去の建築がどのような場所のどの時代のものであっても手本となるならば、賞賛し、記</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>録し、そしてできる限り過去の建築を再生・活用する道を模索していた。16世紀の著述家や建築家（パッラーディオ、セルリオ、ヴィニョーラなど）は、パンテオンのような帝政期ローマの建築を絶対的な規範ととらえ、古代建築の古典化・正典化へと舵をとったが、アルベルティにその意識はなかったと思われる。</p> <p>そしてローマの遺跡を多く描いたのは、ジュリアーノ・ダ・サンガッロは、アルベルティに影響を受けながら、古代建築のエッセンスは、古代からいまにいたるすべての「手本とすべき建築」の中にあると考え、素描帖にまとめた。そして、この『バルベリーニ手稿』の描き手は、廃墟化した都市や建築は、壊れ、朽ちたイメージを持つだけでなく、完成形を想起させる動的で有機的な状態であるとも認識していた。都市ローマに広がる断片的なものは、生き生きとした生命体であり、潜在的な全体性・統一性をジュリアーノに訴えかけていたのである。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>岡北一孝「ジュリアーノ・ダ・サンガッロと古代」、『日本建築学会大会学術講演（近畿）梗概集』、2023年9月、207-208頁</p> <p>岡北一孝「再利用の手法の変遷にみるローマ・ルネサンス建築のかたちと物質性」、『カルチュラル・グリーン』、第5号、2024年3月、23-45頁</p> <p>岡北一孝「建築家がみた15世紀半ばの都市ローマ：アルベルティとジュリアーノ・ダ・サンガッロ」、『日伊文化研究』、62号、2024年4月発行予定、38-49頁</p>